

# 花一会図書館便り

10・11月号（令和3年11月1日発行）

【TEL&FAX】

0186-57-6085

【MAIL】

hanaichie@voice.ocn.ne.jp

花一会ホームページ



Facebook



Instagram



Twitter

第2回

## 「郷土探索への道 黒沢温泉編②」

### 華やかな交友関係と山溪の隠遁生活

先月から連載を開始した「郷土探索への道 黒沢温泉編」。第2回目は、黒沢龍雄<sup>たつお</sup>氏とは一体どのような人物であったのかをお伝えします。

黒沢龍雄氏は明治25年2月、島牧村に生まれた後、医師であった父親の都合で岩内町に移り幼少期を過ごしました。兄弟姉妹は12人で黒沢氏は長男。小学校時代、岩内町出身の画家・木田金次郎とは同級生で親友でした。小学校卒業後、木田氏と共に進学のため上京しようと試みましたが、決心がつかず思いとどまり、札幌市の中学校へ進学することに。中学校卒業後は高等学校等への進学を断念して岩内町へ戻り、父の病院を手伝いながら様々な文芸雑誌に小説や俳句、短歌等を投稿していました。また、絵画にも造詣が深く、北海道美術協会展へ油絵を出展し入選を果たしていました。当時の黒沢氏の交際範囲は広く、文学方面では佐藤春夫・谷崎潤一郎・萩原朔太郎ら、画家では木田金次郎の他、山崎省三・三岸好太郎らに及んでいました。ニセコ町に縁のある作家・有島武郎とも交流があり、木田金次郎をモデルにした有島武郎の小説『生まれ出づる悩み』に登場する「K」は黒沢氏がモデルであると言われています。

昭和初期、黒沢氏は35歳の頃に父親との不和やダダイズム（既存の秩序や常識に対する否定や攻撃という思想）の影響を受け、祖母が営んでいた黒沢温泉の廃宿（現・字日出、薬師神社付近）へと移り住みました。黒沢氏と面識のあった字日出在住のNさんは、「黒沢さんはたまに近所を訪れ野菜などを分けてもらっていた。」と当時の住民との交流の様子を教えてくださいました。昭和29年の岩内大火後には、20年近く不通にしていた岩内町へ訪れるようになったようです。昭和35年に脳卒中で倒れ、弟の営む岩内町の黒沢医院で帰らぬ人となりました。68歳でした。

医者<sup>いん</sup>の家庭に生まれ、幼少期より文学や芸術に触れる機会が多く、青年時代には自らも文学の道を志し多くの作家と交友関係を築いていた黒沢氏は、晩年は隠遁者<sup>いんとん</sup>となり、不遇な人生を送った人でした。

参考：『資料情報と研究 2020』（北海道文学館 編）  
P36～「K」こと黒沢龍雄の位置（苫名直子）

次回、郷土探索への道

黒沢温泉編③

「野球少年から送られた

一枚のはがき」

乞うご期待！！

# 今月のおすすめ本 コーナー



## 『ない本、あります。』

能登崇 著 (大和書房)

ツイッター発祥。一見すると短編集やカタログのようだが、この中の全て、実在しない本。投稿写真を元に表紙をデザイン。さも実在する本のように、その本文をも作り上げてしまうセンスと茶目っ

気溢れる人々の贅沢な遊び。楽しくないわけではない。



## 『娘の遺体は凍っていた』

旭川女子中學生イジメ凍死事件』

文春オンライン特集班 著 (文藝春秋) 実にショッキングな内容だ。読んでいてもどこか違う世界の話なのではと思ってしまうほどに。「イジメ」という言葉だけでは片づけられないほどに。

本書はに文春オンラインの内容+αが掲載されている。被害者の母親の手記には手が震えた。



## 『たまごの旅人』

近藤史恵 著 (実業之日本社)

新米の海外旅行添乗員が主人公の作品集。アイスランド、スロベニア、パリ…行く先々で我が儘なツアー客を相手に奮闘しつつも優しく寄り添う。読み手は本の中で旅をする楽しさもあ

り。最後の章はコロナ禍での現実を突きつけられる。が、一筋の光が差し込むラストがいい。



## 『貯金すらまともにできてい

ませんがこの先ずっとお金に困らない方法を教えてください!』

若林杏樹/漫画、大河内薫/税理士

(サンクチュアリ出版)

具体的に何が問題でどうすればいいのかは分からないけど、漠然と将来のお金に対する不安がある。でも今更誰に聞けば…?という方に。漫画家と税理士の掛け合いを漫画で楽しみながらお金について学べる1冊です。先の見えない今だからこそ知識を。

# お家で生み出す芸術作品

これぞ大人の遊び…!



『お菓子の箱だけで作る  
すこい空箱工作』  
はるきる(ワニブックス)

カラフルで映え♡



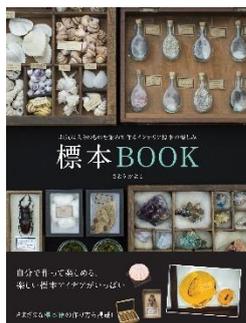
『はじめまして  
韓国カフェスイーツ』  
福本美樹(家の光協会)

愛着もひとしお



『おうちでできる  
おおらか金継ぎ』  
堀道広(実業之日本社)

何を標本にするかは  
アイデア次第



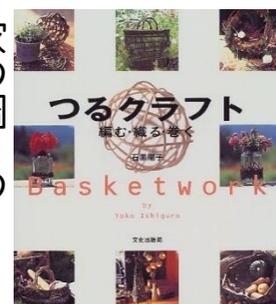
『標本BOOK』さとうかよこ  
(日東書院本社)

その緻密に驚き!



『90歳セツの新聞ちぎり絵』  
木村セツ (里山社)

家の周りの  
つるを集めて



『つるクラフト』石黒陽子  
(文化出版局)